

人と人をつなぐ月刊総合誌

# やすらぎ

平成 20年 5月号 / 250円



英知の教えにおける高潔さ

『フォロー・ミー』The Public Eye (US) / Follow Me! (UK)

従うことの純粹さ

血液中の奇跡の運搬者 ヘモグロビン

譲歩はしてもらうものでもあり、するものでもある



## 今月号 内容

結婚して夫婦になることは多くの人を経験する、ある意味ごくありふれたことです。しかし簡単そうに見えるのとは裏腹に、実際夫婦になって誰もがその難しさに直面します。自分の思い描いていたような理想、特に自分に都合のいいように考えていた事柄は裏切られ、結婚前の互いの約束事項や確認事項が反故にされたりすることも起これば、最初はほとんど気にも留めなかったようなすれ違いが時間と共に埋めがたい溝となり、修復不可能と思えるまでに深刻化することもあります。子どもが小さいうちは我慢を重ね、子どもが独立するのを待ってする熟年離婚もずいぶん増えてきているようです。

夫婦は社会を構成する一番小さい単位である家族の中核であり、未来を担う子ども達を養育する最大の責任を持っており、子ども達にとって人間としての最も身近なモデルとなるように、この関係はすべての人の幸福に関わる重要性を持っています。それにも関わらずその本質やあり方について、日本では一般的に、意外なほどに教育がされておらず、無知・無自覚な人が多いのではないのでしょうか。

他人同士である異性が一緒になり、一から関係を築いていく夫婦というものとは簡単なものではありません。愛以外にも、並大抵でない忍耐や努力、自己犠牲が必要となるかもしれませんが、それだけに人間としての大きな成長の場となり、さらには安全や安らぎを得られるかけがえのない関係を作り出していくことができるのではないかと思います。男性も女性も、互いの特性や自らの責任についてもう少し学び工夫することで、問題が大きくなるのを防ぎ、仲睦まじい夫婦を目指していこうではありませんか。

- ☞ 編集部より.....2
- ☞ 英知の教えにおける高潔さ.....3
- ☞ 心を知る：  
シャウクとイシュティヤーク.....4
- ☞ 魂の像.....7
- ☞ 預言者ムハンマドを語る：  
布教の観点から見たフダイビヤ協定.....10
- ☞ 創造の真実と進化.....12
- ☞ リサーレイヌールより：  
13番めの光.....15
- ☞ 映画から考える：  
The Public Eye(US) / Follow Me! (UK)..17
- ☞ 祈りのある毎日へ.....19
- ☞ 生活の道しるべ.....19
- ☞ 従うことの純粹さ.....20
- ☞ 血液中の奇跡の運搬者 ヘモグロビン ....22
- ☞ プリン.....24
- ☞ 譲歩はしてもらうものでもあり、するものでもある.....25
- ☞ 家族.....27







高潔さとは、貞節、忠義、誠実さからできている神聖な練り粉のようなものであり、それが壁の資材として用いられている建物が、がたついたり倒れたりすることはなく、あったとしても、ごくまれである。

高潔さとは、勇敢さの最も崇高な側面であり、最も重要な特質である。勇敢さの最も低い、そして最も粗末な状態とは、高潔さに対する無遠慮さである。

女性にとって最も名誉ある、そして尊い側面は、貞節さ、高潔さにおいて汚点を持たないことである。自らの高潔さ、そして家族の貞節さを守ることに敏感でない人々は、民族の品位や名誉を守り、保護することにおいても敏感ではない、ということは明らかである。

高潔さと名誉とは異なるものである。富は名誉を生み出すことができるが、高潔さをもたらすものではない。貧しさは、決してそれを侵さない。

高潔さは、全ての民族にとって、彼らがそれを誓約する程度に応じて神聖なものであり、徳の要素の中の最も価値のあるダイヤモンドのひとつである。高潔さを知らない者の誇りや徳は偽りであり、嘘である。

高潔さは比類のないダイヤモンドであり、よりぬきの入れ物の中で守られるべきである。それによってその価値は倍増するのだ。

自分の名誉や高潔さと同様に、他者の名誉や高潔さを守ることに敏感でない人々には何かを託すことはできないし、どのような項目においてであれ彼らを信頼することもできない。

コウモリが光を求めないように、教えを持たない人は教えを求めず、無知な人は知を求めず、徳のないものは道徳的原則を求めず、高潔さを知らない者も高潔さを求めない。



## シャウクとイシュティヤーク(歓喜溢れる熱情と切望)<sup>1</sup>

シャウク(歓喜溢れる熱情)とは文字通りには強い願望、過度に願うこと、知識から生じる喜び、歓喜、切望を意味しますが、イスラーム神秘主義における使い方としては、理解することができず、「発見」されたあとに「突然姿を消してしまう」愛するお方であるアッラーにお会いしたいと欲する心の圧倒的な願望を表します。これについては、愛するお方の顔を見たいという喜びに満ちた願い、興奮、そして過剰なまでの心からの切望だとの説明もあれば、愛するお方に見えたいという感情以外のあらゆる欲求、願い、憧れ、気持ちを燃やし尽くして灰にしてしまう火だとの見方もあります。

シャウク(歓喜溢れる熱情)は愛から生まれます。愛するお方にお会いしたいと切望して燃える心の治療法は、その方ご自身にお会いすることであり、シャウクは人をこの面会に運んでくれる光の翼です。愛するお方が見つかりとシャウクは失われますが、アッラーを求める切望(イシュティヤーク)は増大し続けます。アッラーを思慕する者が切望をやめることはなく、恩恵によってアッラーの実体が特別に顕現するたびに、さらに多くを求めるのです。一瞬ごとに知識の新しい光輝やアッラーの愛、精神的歓喜を身につけておられた、預言者中の預言者であり人類の中で最も偉大なお方(彼に祝福と平安あれ)が、愛の頂上やシャウク、そしてイシュティヤークの間を絶えず飛び回り、「アッラーよ、あなたの完全で美しい顔を見たい、あなたに拝顔することを願います」と祈っていたのはこのことが理由なのです。

クルアーンの解説者の中には、「信仰する者たちは、アッラーを激しく熱愛する(クルアーン 2:165)」の部分について記す中で、シャウク(歓喜溢れる熱情)は、部分的に知覚が可能であったり不可能であったりするもの、部分的に理解が可能であったり不可能であったりするものに対して感じられるのだと述べています。一度も見たり聞いたりしたことのないもの、全く知らないものに対して人が熱意を感じることはありません。反対に、完全に理解したり知覚できるものに対しても人が興味を抱くことはないのです。

シャウク(歓喜溢れる熱情)とイシュティヤーク(切望)は二つの範疇に分けられます。一つ目は、過去の方向への永遠性の中でアッラーにお会いしじっくり眺めた後でその愛するお方から離別することによって引き起こされるイシュティヤークです。ルーミーの革笛がもらしたため息や、ユースフ・エムレが回転する水車から耳にした悲痛なきしむ音は、そのような別離を表現しています。こうしたため息はアッラーとの最終的な合一やかれに見えることが起こるまで続くでしょう。二つ目は、人が愛するお方を覆いの背後から目にし、それゆえかれを完全に理解し得ないときです。信者はアッラーの存在を感じますが目にすることができません。愛の蜂蜜に指を浸したのにそれに引き続く新たなステップをとることが許されない状態です。喉の渇きかられたその信者は「喉が渇き

<sup>1</sup> この文章が “Key Concepts in the Practice of Sufism” よりの訳です。

きってしまった!水をください!」と言って泣き声をあげますが、なんら応答を得られないのです。

すべての男女の魂は、過去に向かう永遠であった集会でアッラーを見るのですが、そこでアッラーは彼らに、「われはそなたの主ではなかったか?」と尋ね、彼らは確信して「はい」と答えています。我々は宣言するので、アッラーを目にしなくても信じることを、人類の真の人間らしさが必要とするのか、もしくはそのことで人類が試される必要があったのか、この集会のあと、人類は一時的な別離の苦痛に放り出されたのでした。このことが理由で、人々はアッラーのことを意識的もしくは無意識に切望する中で、かれのことを夢見、アッラーとの再会を切望し焦がれるのです。これよりもさらに重要なのは、最も神聖なるお方が、あらゆる存在から本質的に独立している状態に相応しいやりかたで、清らかで汚れのない、純粋な魂に対して感じる切望です。アッラーの熱望は、人の心に入り込む切望の真の源なのかもしれません。

熱情は、あらゆる内的・外的感情とともに愛するお方に向かうこと、そしてアッラーに見えたいという感じ以外のすべての欲求を締め出すことを意味します。切望の文脈においては、人が、アッラーに結びついた欲求や願望でみなぎっていることを意味します。熱意も切望も精神を修養します。どちらも苦痛を伴いますが、活気を与えると共に疲れをもたらすものであり、悲惨だけれども有望でもあるものです。

愛で焦がれ熱情にうなされる人ほどに苦悶を味わい、同時に幸福感を持つ人は他にないでしょう。そうした人々はアッラーに会えるかもしれないという考えや希望に酔いしれているとき、まさに天使のような状態となり、そのために、その瞬間はたとえ許可されたとしても天国に入ることに同意しないほどです。彼らの心の中には離別の苦痛から激しく燃え盛るあまり、天国の川でさえその心の炎を消し去ることはできません。矛盾しているように思えるかもしれませんが、その人々は炎から逃れようとは微塵も考えません。というのは、天国にある宮殿が、アッラーに見えんとする熱意の炎に焼かれるのを防いでくれたとしても、その人々は、地獄の住民が地獄の業火からの救いを求めるのに似た叫び声をあげるでしょう。この世的な人々には、この熱意が意味するところ、もしくはそれを有する人々の状態といったものは知りえません。熱意を持った人々にとっては、この世的な人々がこれほどまでにこの世の諸事や楽しみに没頭していることが驚きと映ります。この驚きは極めて自然なものです。万能のアッラーは預言者ダーウッド(彼に平安あれ)にこう言われました。

「ダーウッドよ!この世に愛着を持ち傾倒した人々が、われがいかにか彼らを心配しているか、罪に抗ってほしいと願っているか、そしていかにかわれが人間たちに会いたいと望んでいるかを知ったとしたら、彼らはわれに会いたいという熱情で命を落としてしまうだろう」

アッラーに会いたいと願う熱情が人の生命に入り込んだとき、その結果はあふれ出る痛みと歓喜の感情であり、このような叫び声です。

熱情で私は途方に暮れ、熱情が私を焼き尽くした。

熱情が睡眠と目の間を邪魔している。

熱情が私に攻め入り、熱情が私を夢中にさせた。

私は熱情に制圧され、熱情は私を畏怖で打ちのめした。

この程度に達した熱情は人を駆り立てて立ち上がらせ、踊らせ、そして回転させます。そうした動きも許されるべきでしょう。そうした精神的状態に抗うことなどできないからです。

恍惚の人が恍惚感に浸るのを食い止めようとする人に言いなさい。

あなたは我らと共に愛の美酒を味わったことがないでしょう、だから我らを放っておきなさい。

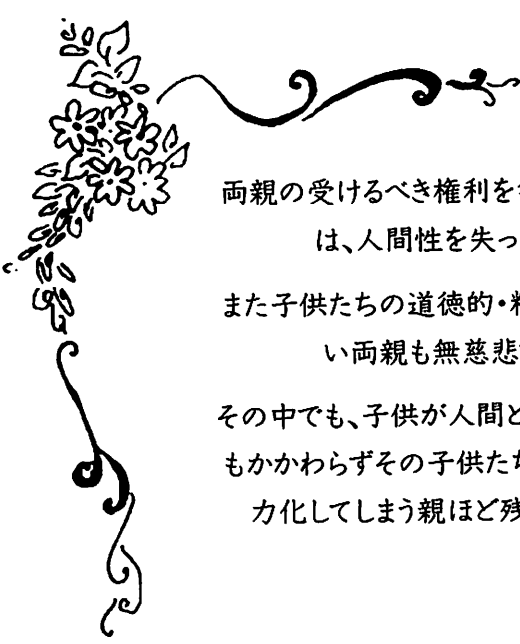
魂が愛するお方に見えんとする熱意に溢れるとき、

知りなさい、精神性を知らないあなたよ、体は踊り始めるということを。

愛の人を駆り立てる導き手よ、立ち上がって我々を動かせたまえ、

愛するお方の名前とともに、そして我らに生命を吹き込みたまえ

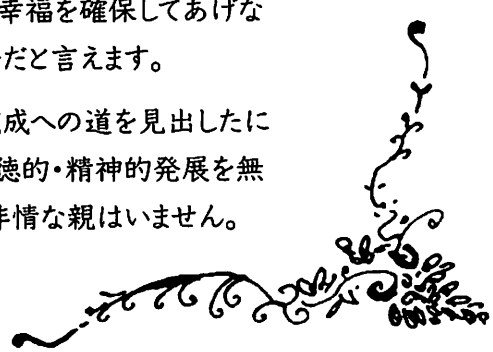
我々の時代、一部の人は、アッラーの豊かさや力の前における自らの貧困さと無力さを認めること、感謝、そして熱情に基礎を置いた道でクルアーンと信仰に仕えることを好みます。この文脈において熱情とは、絶えず希望を持つこと、そして落胆したりエネルギーを失ったりせずに奉仕を継続させることを意味します。また、極めて悲惨な状況にあったとしてもアッラーの慈悲の側面を模索し、アッラーの援助と勝利を求めてかれのみに頼ることも意味します。



両親の受けるべき権利を省みず、両親に従わない子供は、人間性を失ったけだもの同然です。

また子供たちの道徳的・精神的幸福を確保してあげない両親も無慈悲で残酷だと言えます。

その中でも、子供が人間として完成への道を見出したにもかかわらずその子供たちの道徳的・精神的発展を無力化してしまう親ほど残酷で非情な親はいません。





## 魂の像

地上の後継者に備わるべき特性については以前あらましを述べましたが、ここではその内容をさらに展開し明確にしたいと思います。

後継者の第一の特性は完全な信仰です。人類創造の目的についてクルアーンでは、知識の裾野、愛の精神、恍惚とした愛や喜び溢れる熱意といった境地、精神的快樂の色合いを持ち合わせながら神を崇拝することであると証明されています。人間は、自らの本質から存在の深遠に達する経路を作り上げることによって、もしくは存在の様々な断面を取り出して自らの本質を見極めることによって、信仰と思考の世界を構築する責任があります。これによって魂に潜在する人間の真理の出現が引き起こされます。信仰の光によってのみ、我々は自らの本質やその本質の深奥、そして存在の目的や着点を悟ることができるのです。そして宇宙や事象の内側、またそれを超えたところにあるものを認識できるようになるのです。すると我々は存在をその次元において理解することができるようになるのです。不信仰は妨害され、閉塞し、窒息したシステムです。不信仰者の目には、存在は混沌とともに始まり、偶然の一致という驚くべき不確実性の中で展開し、恐るべき終焉に向かって急速に退いていくものとして映ります。この激しく横揺れし回転する中では、魂に救済や喜びを差し伸べる神の慈悲という息吹きもなければ、我々の人間としての願望が安堵して身を寄せ、ひんやりとした慰めをもたらすそよ風に吹かれるほんの小さな場所もなく、ましてや我々が歩を進めるための足場を見出すこともできません。

対照的に、経路や目的地、そしてなすべき義務と責任を把握している信仰ある人の目には、すべてが燦然と光り輝きまぶしく映ります。そういった人々は一抹の不安も抱かずしかるべき場所に足を踏み入れ、目的地に向かって恐れることなく確信して安全に歩を進めていくのです。道程では幾度となく存在やそれを超えたものについて詳細に探るでしょう。何回も何回も物事や事象を蒸留にかけられるでしょう。ありとあらゆる扉を開け、あらゆる対象物と関係を構築しようと試みるでしょう。知識や経験、発見が不十分なきときには、自分自身や他者によって確認できた限りの事実で満足し、旅を続けていくでしょう。

これらの基準に照らせば、信仰を持った旅人は非常に重要な力の源を見出していることが分かります。「神以外の何者も、権能も力も持ち給わぬ」という言葉に表現され、来世に属する銃弾と財宝は、それを携える人が他の何ものをも必要としないほどの重要な力と光の源であります。ひいてその人は常に神を目にし、神を知ります。神の同伴者に加えてもらおうと急行し、神を目指し神に従って人生を方向付けます。現世のあらゆる力に対しては、知識や神への信頼に見合った形で、そしてすべてを克服できるという希望を持って挑みます。たとえ極めて困難な状況にあらうとも喜び溢れる熱意をもって生き、決して悲観主義に陥ることはありません。

この点については「リサーレイヌール」やその他多くの書籍で主題として扱われているので、読者の皆さんにはこれらの作品をお勧めするとして、私は二番目の特性に話を移したいと思います。

後継者が備えるべき二番目の特性は「愛」であり、復興における最も重要な万能薬だと考えられます。神への信仰そして神の知識を胸に、その信仰や知識に応じて自らの心を整え、心に磨きをかける人は、あらゆる人間、ひいてはあらゆる被造物に対して深くて広大な愛情を抱きます。このことによってその人は、恍惚や歓喜、思いを寄せること、神に引き寄せられる感覚、そして精神的快楽を味わいながら、全てを包括する愛の潮が満ち引きする一生涯を送るのです。あらゆる時代に通じることですが、偉大な復興を遂げるためには今、新たな認識のもと、心は愛で溢れんばかりとなり、愛で熱狂的となり、喜びに満ちた熱情でみなぎる必要があります。愛なくしては、結果に関して、持続的かつ効果的な活動や努力を実現することは不可能だからです。同様に、そうした活動や努力は来世を念頭にして取り組まれるべきです。アッラーの前において、存在させ存在するという関係の中で我々の立場を確立し、その上で我々の存在がアッラーの存在という光の影であるという観点からアッラーに創造されたことに喜びを感じることに、アッラーのご満悦を得ることが創造されたものの目標であり、創造の理由であること、そして常にアッラーの愛とご満悦を求めること、これらを通じて我々は神聖な愛を理解することができます。そのような神への愛は神秘的な尽きることのない力の源であり、地上の後継者たちはそれを軽視することなく十分に享受しながらそこに生きるべきなのです。

西欧は愛と、その物質的な色合いを持つ側面の中において、哲学者や霧のかかった哲学を通じて知り合いました。少しだけ味わいはしましたが、疑念や躊躇を持ち続けました。我々は存在とその源について、クルアーンとスンナというレンズを通じて見て行きましょう。これら二つの源の均衡ある原理を参照し、それらに頼ることによって、そして形而上学に開かれた広がりへと乗り出すことによって、我々は創造主への愛—我々の心に発火する愛の興奮—を自覚し、ただアッラーのためだけに我々が全存在に抱く愛情に気付きます。なぜならば、これら二つの源（クルアーンとスンナ）の中において、人間の起源や宇宙における人間の立場、その存在の目的、従うべき道とその最後は、実に彼自身の考え方や感情、良心、期待と合致していることが示されているため、その気付きのあとに、それについて思い巡らしたり感服せずにはいられないのです。

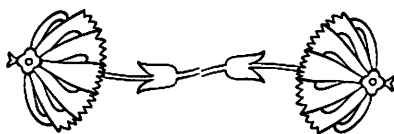
心の人にとって、これら二つの輝く源は、勢いよく湧き出す熱意の泉であり、魅力の宝庫です。感情を清らかに誠実にし、必要性を感じながらそれらを求める者が手ぶらで送り返されることはありません。そしてそれらに庇護を求める者は永遠に死ぬことはありません。それらに注意を向け、庇護を求める人たちが、イマーム・ガザリー、イマーム・ラッバーニ、シャー・ワリー、もしくはベディウヅザマン・サイド・ヌルスィといった人々のような誠実さと知性の深さをもってそうするのであればそれで十分です。ジャラルッディーン・ルーミー、シェイフ・ガーリブ、もしくはメフメト・アーキフのような熱意と興奮をもってそれらに近づいていくのであればそれも十分です。ハーリド・イブン・ワーリド、ウクバ・ビン・ナフイー、サラハッディーン・アイユービー、征服王メフメト、もしくはメフメト二世のような信仰と行動を伴ってそれらに向かえばそれで十分です。あらゆる時代と場所を包み込み、そこに満ち溢れる彼らの熱意と、現代の作法、スタイル、そして方法を融和させ、決して古びることなくあらゆる時代を超越するクルアーンの精神に到達しようとする、ひいては普遍的な形而上学に到達しようとするのは我々の第二番目のステップとなります。

後継者としての第三の特性は「論理的思考、論理、良心の三重奏で科学に向き合うこと」です。人類が暗い空想の裏側に引きずり込まれているような時代において、人間の持つ一般的傾向への返答ともなりうるそのような転換は人類全体の救済に向けた重要な一步となるでしょう。ベディウヅザマンが指摘し



ているように、この世の終わりに人類は、持てるすべてをつぎ込んで知識と科学に救いを求めるといいます。そして人類は学問からあらゆる力を得て、力は再び科学の手に渡るとされています。言葉の純粹さ（ファサーハ）、雄弁さ（バラガ）、そして優れた表現力または話術はあらゆる人が興味を持つ対象になるといいます。つまり我々は再び学問と言語の時代を迎えることになるのです。我々を取り巻く億測のあやふやな空気を取り払うために、そして真理や真実の中の真実にたどり着くためには、実に他にとるべき道はないのです。過去数十年間の空洞を打開し、技術と情報において満足の域に達し、来る年も来る年も我々が耐え忍んでいる、弱々しい傷ついた国家の意識下の損害を修復することによって、我々の能力を今一度発揮することは、すべてイスラーム的思考のプリズムを通して構築される科学を主張し、表現することにかかっているのです。少し前に関して言えば、その方向と目標は定められていなかったため、時として知識は実証哲学者の科学に混入し、唯物論的な思想に混入し、科学的思考は深刻な混沌に陥り、科学者たちは收拾のつかないほどの尊厳の失墜を味わったのでした。この空白は外国人を利するものとなってきました。彼らはわが国の隅々まで学校や諸機関を精力的に設立し、こうした教育機関を利用して我々の子供達に疎外感と異質性を吹き込んだのです。我々の社会の一部は耐え難いほどの不面目にも才能ある優れた子供らをこうした機関で学ばせ、さらに拍車をかけて疎外感と異質性を感じさせたのでした。しばらくするとこうした若くて未熟な、裏切りにあった世代には、信仰も宗教も何も残りませんでした。信仰と宗教は崩壊し朽果てました。国全体で、思考や概念、芸術においては浪費や安っぽさに支配されエゴイズムがありふれたものとなりました。それが起こった理由は明らかです。憂慮や疑念もなく我々が若者の知性を委ねたこうした学校や機関では、例外なくアメリカの文化やフランスの道徳性、イギリスの習慣や伝統などが科学や科学的思考に先立って提供され維持されてきたからなのです。

ゆえに若者たちは、科学や方法論、テクノロジーを用いて彼らが生きた時代に追いつく代わりに、様々な陣営や党派ごとに集まってマルクス主義やデュルケム主義、レーニン主義、毛沢東主義といったゲームをやり始めたのでした。共産主義やプロレタリアート独裁の夢に慰めを見出した者もありました。フロイトのコンプレックス理論に入り込んだ者もあれば実存主義に狂いサルトルにはまってしまう者あり、マルクーゼの言葉を引用して吹聴する者あり、カミュの狂乱状態にはまって人生を無為に過ごし始める者もありました。これらすべては我々の国で起こり、続いてきたことであり、いわゆる科学の館はこうした思考や経験を養成し助長する原因となったのでした。この危機の時代、暗黒の魂の口々や発言は常に宗教と宗教的なものを誹謗中傷し続け、西洋に由来する狂気と精神異常を絶え間なく前面に出し続けたのでした。当時のことやその時代の安っぽい駒たちを忘れることなど絶対に不可能です。我々の国民や国家に損害をもたらしたそのような環境を用意した人々のことは、社会の意識の中で犯罪者として永遠に記憶され、非難され続けるでしょう。





## 布教の観点から見たフダイビヤ協定

フダイビヤにおける和解は、布教の特別な機会であった。預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）が、このような厳しい条件を含む協定を受け入れたことは、聖ウマルのような最も親しい者たちからさえも受け入れがたいという反応が見られ、一時的には否定的な雰囲気を生み出した。しかしその翌年、イスラーム教徒たちは大手を振ってマッカに入ったのであった。これはマッカでその年の間じゅう語られる話題となった。そしてそのようにして、その地の人々の心は少しずつイスラームを受け入れる準備を整えていたのである。マッカの有力者ハーリド・ビン・アルワリードやアムル・ビン・アルアースといった人々が、その時期に自らの意志でムスリムとなったのであった<sup>\*</sup>。彼らが自発的にムスリムとなったことは、後の布教活動にとって非常に重要な意味を持つこととなった。

さらには、この協定の際、教友たちが預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）に見せた従順さはマッカの有力者たちの目にも留まっていた。このことも、マッカの住民たちをイスラームに近づける力となったのである。

## 個別の対応

預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）は、統治の頂点におられる時でさえ、人間関係には最高の注意を払われた。彼は2～3年のうちにマッカの住民が全てムスリムとなることを御存知であった。それでも、ハーリド・ビン・アルワリードやアムル・ビン・アースの入信を特別に称賛され、彼らに特別な好意を示された。そばにいた教友にこの二人を迎えに行かせ、ハーリドが従順の意味を込めて手を伸ばした時、預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）は彼に言われた。「私も驚いていました。ハーリドのような賢明な者がなぜ憎悪の中にとどまっているのか、と。いつの日かあなたがムスリムになるということを確認していましたよ」<sup>†</sup>

このような立場にある人物に預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）が語ったこの言葉は、称賛の中でも最高のものである。そしてハーリドはこのような賞賛を受けて、それ以降の人生に対してどれほどのやる気を感じたことか。アムル・ビン・アースも預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）の手をつかんで離さなかった。そして「預言者よ、私の罪のために赦しを求めてください。アッラーに願ってください」と言い続けていた。「祈ってください、アッラーが私を赦されるように！」預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）は彼にも称賛を示され、そして次のように言われた。「知らないのですか、イスラームは、過去

<sup>\*</sup> Ibn Kathir, al-Bidayah 4/272

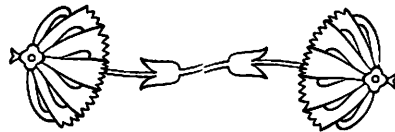
<sup>†</sup> Ibn Kathir, al-Bidayah, 4/273; Hindi, Kanz al-'Ummal, 13/374

の罪を全て消し去るのです。人はイスラームに入った時、ちょうど母親から生まれた時のように清らかになるのです」<sup>\*</sup>

預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）はもはや彼らの心に大きく影響を与えられていた。その優れた人格を布教のために生かされ、人々も少しずつそのお方の元に近づいて来ていた。その教えに従い始めていた。そして、その時に始まったことは今でも続いているのである。預言者ムハンマドの聖なるメッセージは今後も、審判の日までその特別な形で続くだろうと我々は信じている。

報道されている限りであれ、我々が知るところによると、今日欧州で何百万もの人々がムスリムとなり、世界は少しずつイスラームの方に向きかけている。欧州はイスラームを<sup>はら</sup>孕んでおり、近い将来それを出現させるであろう。

「イスラーム世界においては出産はほぼ完了した。さらに、東側諸国を見てほしい。半世紀以上もの年月が、しかも人々が恐ろしい圧制を受け続けた年月が流れたのにも関わらず、この地方に生きるムスリムたちは思考や精神世界において何も失っていないようである。中央アジアのトルコ系諸国、ウズベキスタンやキルギスタンなどを見てほしい。近い将来、モスクワの中心部でもアザーンが聞かれることであろう。そして少しずつ、イスラームへの入信が行なわれるであろう。預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）の布教を引き継ぐ者たちは、世界のどこにも、布教がされていない土地を残さないであろう。そしてこれらを行なう時も、それぞれが愛情と慈悲に満ちた者として振る舞うであろう」



---

<sup>\*</sup> Ibn Kathir al-Bidayah, 4/271



### ダーウィニズムの4原則

ダーウィンは生物において見られるいくつかの類似点から思考をスタートさせました。ダーウィンとともに彼に影響を与えた科学者たちは、次の最も重要な4つの説を彼らの論文の根拠としています。

- 1 環境に伴う外的条件は時として生物の内的影響を及ぼす。こうした影響は多かれ少なかれ生物に変異を引き起こす要因となる。
- 2 こうした変化は生物にさまざまな形で、また部分的に利益を与える。
- 3 この小さな変化は遺伝を通じて次世代に受け継がれる。
- 4 自然淘汰：数の急激な増加に対して生物は食物を確保するために生存競争を行なう。争いでは強者が勝ち、生き残る。弱者そして敗者は絶滅していく。さらに自然災害や事故、予期できぬ事態もまたそれに対抗する力のないものの命を奪い、強い新種が残る。

この考えは、先に述べたマルサスの経済学的視点に基づくものです。

それでは、ダーウィニズムの基礎を構成するこの4つの基本原則とそれに関する問題を詳しく検証してみましょう

### 進化論と生物間において見られる類似点

ダーウィンは自然界に見られる相似性あるいは類似点について取り上げています。彼によれば、高等生物の中にはその諸器官に不完全性や不足の認められるものがあり、それらは進化の過程で下等なレベルにあったときから引き継がれたが、新たな種となつてからは何の役にも立たないため、そういう状態、つまり不完全となり不足となった器官なのだそうです。例えば、人間の体毛は哺乳類の毛から人間に引き継がれたものですが、その過程で多くの毛が失われ、ほんの一部に残ったもののだといます。それはなぜなのでしょう。

ダーウィンのこうした説には何か論理的な一貫性があるとは言えません。人間に顔や目や耳があるからといって、人間がサルから派生した生物であることにはなりませんし、あるいはある種の生物と同じか似ている器官があるとしても、それらの生物がお互いに同じ起源を持つことを示しているわけではないからです。この世の多くの生物の間には類似点があります。なぜならすべての生物は4つの基本元素、すなわち窒素、炭素、酸素、水素から成る存在だからです。人間も動物も非常に共通した食物から栄養を得ます。特に人間は同じ種類の食物を摂取します。にもかかわらず、すべての生物はそれぞれ異なっていますし、人間もまたいろいろな面でひとりひとは他者とはかなり異なっています。外見やつくり（構造）が似ているとしても、それが同じ起源を持つものとは限りません。起源を同じくしていながら相違点があ

るということは、生物の存在する目的、意味、役割といったものがまず初めにあつて、それに応じてからだが形成されたことを示しています。ある建物を無計画に、あるいは素晴らしく建て終えた後になって、それでは機能はどうでしょうか、と議論されることはありません。知性において生じた概念は、中味を伴わずしてことばという形を成すことはありませんし、本に書かれることもありません。どの建物もだいたい同じような材料からできているものです。建物の種類にも多くの類似点が見られます。しかし建物はどれひとつとして他と同じものではありません。あらゆることば、または言語を構成する文字には限りがありますが、どの単語もそうした限りある記号によって表わされているのです。

7文字から成るある単語のうち6文字が同じであっても、残る1文字の違いがその単語と他の単語との違いとなります。6文字が同じでも1文字が異なるなら、異なる7文字単語は7通りあるかもしれません。

ここで6つの文字が同じであることは、こうした単語がみな同じところから派生したものであることを意味してはいません。どの単語にしても、それを存在させ、その文字から構成される要件を決定するのは、それぞれの単語の意味です。これと同様に、生物間でも似たような機能のためには、似たような体格や器官が必要となります。生物界では、からだのつくりにも類似点があったり同じ物質が用いられていたりするにもかかわらず、無限のバリエーションがあります。あるいは逆に言えば、無限のバリエーションがあるのに、からだのつくりにも似た点があることは、まさに何らかの意図や意思、意味があることを示しています。

このことから、意味によってことばが成り立っているように、生物はその存在理由、目的、備え持つ意味に応じて創造され、自らに適したからだの構造、適した器官を与えられるのです。したがって、生物間に見られる類似点は、ダーウィンが唱えたような派生ではなく、そのまったく反対のことを示すものです。

第二に、地上には無数といえるほどの生命、さらに何十万もの種が存在します。もしすべての種にそれぞれ違う顔、まったく異なる器官、他種とは完全に異なる構造やからだを与えられていたならば、数限りない構造や器官や特性が必要となっていたことでしょう。これを人間に当てはめて考えてみると、動物たちの世界に比べて人間はそれ自体が一つの種を形成しており、ひとりひとりが異なったからだのつくりや形をしているべきということになるのです。

疑うべくもなく、アッラーはすべての種に、またすべての人間に特有の異なる形や構造を与える力をお持ちです。しかしそうした状況では、生物界でも人間同士でも他者と知り合う、接近する、助け合う、混じり合う、ともに過ごす、といったことが成立しないため、ある種は他の種とはまったく関わりを持たぬままとなり、結果としてこの世界は何者も生きられぬものとなっていたことでしょう。

さらに、似ているものすべて、あるいは類似性のある二つの存在は互いに同じであるというわけではないのです。例えば液体にも多くの種類がありますが、ローズウォーター（薔薇水）と塩酸はまったく異なるもので、その使用法についても、一方は人を気持ち良く落ち着かせてくれますが、もう一方は肌に触れば焼けてしまいます。同様に、太陽も電気もろうそくもオイルランプも光を放ちますが、これらすべてを元はひとつの同じものなどと関連づけることはできません。人間のからだに見られるひとつあるいはそれ以上の器官が人間以外の動物にもあること、さらに人間と動物の大きな類似点でさえも、この二者の間のつながりを示すものではありません。なぜならすべての生物には、生命を維持し、生きてい



く上でしなければならないことを遂行する機能のために必要な器官が与えられるからです。さらに今日、これまで体内では不用で退化したと考えられていた器官の多くが非常に重要な役割を果たしていることがわかってきています。

これと共に、時として自然界にも環境や環境の普遍的構造に適さないと思われるものがあるかもしれません。いいえ、あるかもしれないではなく、あるのです。しかし、そうしたことにどんな意味があるのかについて語るほど、我々は自然というものすべてを説き明かしたわけではありません。

それから、あるものがほとんどふさわしからぬところに何かのデザインの要素として置かれ、注目を集めることがあります。これが目に留まり、人がそれを根拠に全体的な観点においても通用すると判断するとすれば、過ちを犯すこととなります。まさにここがひっきりやすし落とし穴なのです。

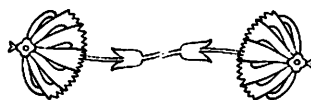
千の門を持つ城のわずか2つの門が閉ざされているのを最初に見て、城のすべての門は閉まっていると思ひ込んでしまうこと、あるいは根も幹も枝も葉もそして実もすべて健康だというのに、たった2つの実が腐っていた木があって、実だけに目をやり、まずその2つの腐った実をみただけで木そのものが朽ちていると決めつけることがひどい過ちであるように、1つか2つの器官の退化を見てそれが無用であると見なし、それによって異種間に遺伝と進化があると結論づけることは、同じく非科学的な過ちなのです。

類似の観点から出発したダーウィンは、人間が患う病気のいくつかが動物にも見られることを、まるでもうひとつ別の証拠であるかのごとくとらえています。ここで言えることもまた今まで述べてきたことと変わりません。人間には、現在までに知られている病気について数十もの種類があり、さらにもっと細分化して見れば数百種の病気があります。もし生物ごとに特有の異なった病気があるとすれば、数限りない種類の病気が存在したはずで、加えて、おおむね同じ物質から成り似たような機能を持つ人間と動物のからだに似たような病気が見られるのはまったく当然のことであって、このことからさまざまな生物の起源に到達しようとするには何の価値も見出せません。

さらに付け加えるならば、人間の病気は、例えばまったく同じものはおろか、似たものでさえサルには見られません。それとはまったく逆に、そうした病気のひとつかそれ以上がサル以外の動物で見られることがあります。

例えば、慢性気腫は馬、白血病は猫や牛、筋ジストロフィーは鶏やネズミ、動脈硬化は豚や鳩にもありますし、血液凝固障害と腎炎は犬、胃潰瘍は豚、動脈瘤は七面鳥、胆石はウサギ、肝炎は犬や馬、腎結石は犬や牛、白内障は犬やネズミもかかる病気です。

だから人間はネズミから進化したのだとか、もともとは犬と同じ生物だったのだとか、牛から変異したのだなどと唱えるべきでしょうか？人間にも動物にも同じ種類のウィルスや細菌が存在するのでしょうか。こうした点のどれをとってみても、起源の同一性を示すものではありません。生物学的には人間から極めて遠い鳥類やウサギのかかる病気がありますが、これには人間もかかります。しかしそうした病気があるからといって、人間をウサギに近いものと考えすることは、そもそもダーウィンの立場からも遠ざかることとなります。なぜならダーウィンは、自分の理論を進化と結び付け、結論として人間と他の動物の間にサルを置いたからです。



## 13 番め目の光

### 10 番目のしるし

イブリース（悪魔）の最も知られている巧妙さとは、彼自身に従うものたちに、彼自身を否定させる事である。このような時には、物質主義者達の哲学に従って、頭を混乱させたものたちが明白なこれらの事実に躊躇を示しているため、悪魔のこのような畏に対して、いくつか例を挙げて申し上げてみよう。それは次の通りである。

まず始めに、人間の中でも、悪魔の機能を果たすいろいろな悪の魂が自明に存在するように、ジンの中にも肉体を持たない悪の靈魂が存在するのは、確かである。もし彼らが肉体という服を身につけたなら、この害悪な人間達と同等となったであろう。さらに、この恐ろしい関係の結果としてある不正な学派は、「人間の形をした非常に害悪をもたらす悪い魂は、死後悪魔となる。」と公言している。

高品質なものが改悪されるとき、低品質のものが改悪されるよりもより劣ったものとなることは、良く知られていることである。例えば、牛乳とヨーグルトが腐ったとしても食べることはできるが、油が悪くなったときは食べるができない。時折毒のように作用することさえある。そのように、創造物の中で最もすばらしいもの、おそらく最も高貴な人間が改悪されるなら、悪くなった動物達よりもさらに劣悪となる。腐敗物の臭いに甘美さを感じる害虫のように、そして又噛むことによって毒を与え、喜びを得る蛇たちのように逸脱という沼地の中で害と悪徳により喜びを感じ、誇りを得る。そして悪行という暗黒の中で害悪や犯罪によって喜びを得る。きわめて簡単にそ

れらの者たちは悪魔の本質へ近づく。そのように、ジンによる悪魔の存在の確かな証拠とは、人間による悪魔の存在から明らかにすることができる。

次に、29番目の言葉の中で、何百もの確固たる証拠によって精霊達や天使達の存在を証明する明白な証拠もまた、悪魔の存在を証明している。その言葉で私達はこのような点からも言及している。

3番目として、万有の中で善事の掟の代理者であり、管理者である天使たちの存在は、あらゆる宗教においても統一の見解として確認され、不動であるように、悪事の代理者であり案内者、そしてそれらの事柄の掟の原因となる悪の魂や悪魔的なものが存在する事は、英知と真理の点からも確かである。確かに悪事の中では意識の覆いの存在も、さらに必要なものとなる。なぜなら、28番目の言葉の冒頭で述べられているように、全ての人、全ての真の善を見ることができないため、明白な害悪と欠陥によって偉大な創造者に対し、反抗しないため、そして彼の慈悲を責めないように、英知を否定しないように、そして不正な苦情を訴えないようにと明らかな状態に覆いをした。そして、反抗、否定、苦情がそれらの覆いへ向うようにし、永遠の英知の持ち主で、全てを役立つように創造されたお方にそれらが向かわないように取り計らわれた。例えば、死を迎えた僕(しもべ)達の苦情から聖アズライールを助けるために、病気を決定的な死の覆いとなした。聖アズライール(a.s)が魂をとることに覆いをし、無慈悲に見えるその状態への苦情が、真の主に向けられないようにと取り計らわれた。そのように、より確かなことに害悪や悪い事柄による反抗と否定が偉大

なる創造者へと向けられないように、神の英知は悪魔の存在を必然とした。

4番目に、人間が1つの小世界であるように、世界もまた大きな1人の人間である。この小さな人間は巨大な人間の目録であり、要約である。人間に存在する雛形としての偉大な原型は、偉大な人間にも確かに見出される。たとえば、人間の記憶力の存在は、世界の保護された板（ラウフィマフズ）の確かな証拠である。そのように、人間の心の片隅に、悪魔の囁きと呼ばれる「疑う」という内的機能が存在する。疑惑の感情を増幅させることによって語る悪魔的な言葉と、汚れた疑う力は、小悪魔のように機能し、その持ち主達の理性や望みに反し、人々が行動すること、そして感覚的にも理性的にも全ての人々が彼らの自我の中にそれらを見出すことは、この世界に大悪魔が存在することの確かな証拠となる。そして、この悪魔の囁きとその疑念が1つの耳と1つの舌となるため、それに息を吹きかけ、語らせる外面的な害悪の個々の存在を感じさせる。

## 11番目のしるし

逸脱した者達の害悪に対して万物が怒り始め全世界の諸要素が激怒し、存在するすべてのものが荒れ狂うことを、英知なるクルアーンは奇跡的な形で、説明し給う。ノアの民を襲った大洪水と天地の襲撃、アードとサムードの民の拒絶に対する空気の諸要素の怒り、ファラオの民に差し迫った海と水の分子の攻撃、そしてカルンでの土の要素の激怒を描く。さらに不信仰者たちに対し来世で、「激しい怒りのために破裂するかのようである。・・・(大権章8節)」の神意による、火獄からの攻撃と怒り、他の存在すべての不信仰者たちと逸脱者に対する激怒を示し給うた。非常に恐ろしい形で、そしてまた奇跡的は方法で、公言し、逸脱者達と彼らの反抗を抑制し給う。

質問：このように些細な者達の些細な行為と個々人の罪が万物の怒りを買うのだろうか。

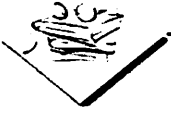
「光の書簡集」の他の部分と前述のしるしによって説明されたように、不信仰と逸脱は、あらゆる存在に関わり、恐るべき行き過ぎの行為であり、罪である。なぜなら万有のすべての創造の中で最も偉大な果実とは、人間の崇拜行為である。それは、教え育み給う神に対して、信仰と崇拜行為による応対である。

そもそも不信仰と逸脱は不信仰による否定によって存在理由と存在存続の理由である最大の果実を拒絶するために、あらゆる被造物の権利を侵害し、逸脱してしまうことになる。そして、神の芸術作品であるすべての存在の姿形に、神が顕現すること、その存在価値を映し出す聖なる御名の顕現を否定する。聖なる御名を軽視し、被造物すべての価値を下げることによって、存在に対し非常に侮辱を与える。すべての存在が気高さ義務によって、お互いが神に仕える任務中の役人の地位にあるにもかかわらず、不信仰によって価値を下げさせ、魂を失い、無常で、無意味な位階に陥ったために、すべての存在に対して、その権利のある意味冒流することになる。

このように、様々な逸脱の道は、その段階によって、万有の創造に関する神の英知と現世における永遠への万有の創造目的に害を与えるため、拒否する輩や逸脱者達に対して行き過ぎであるとみなし、存在すべてが怒り、創造物が皆憤激する。

食欲で体は小さいが、罪と抑圧がた大(だい)なる、間違いや過ちの多い哀れな人間よ、

万有の激怒や創造物の嫌悪、存在の憤激から救われたいとの望むなら、その方法とはもちろん英知なるクルアーンの聖なる管理下に入ることである。クルアーンを伝達するアッラーの使徒のスナ(慣行)に従うことである。さあ、入りなされ、そして従いなされ。



『フォロー・ミー』 The Public Eye(US) / Follow Me! (UK)

夫婦というのは不思議なものです。全く違うところで生まれて育って、生活してきた二人が、どこかで出会って、一緒に暮らしていくことにする。世の中にはたくさんの夫婦があって、家族があるのだから、当然のことのようにも感じるのですが、よくよく考えるとちょっと不思議な感じ。どうしてこの人なのか？どこに惹かれたのか？？どこが尊敬できるのか？？そして夫婦関係はうまく続けていけるのか？？？

今回ご紹介するのは、ちょっと変わった夫婦のお話です。

---

英国の上流階級に属し、地位も財産も申し分ない一流会計士チャールズは新妻ベリンダが浮気をしているのではないかと思いはじめた。浮かない顔をし、ふらふらと外に出て帰ってこない。確かに、街の小さなレストランでウェイトレスをしていた彼女のメニューすら覚えていないあどけなさに惹かれて結婚してしまったのを後悔しないわけでもない。しかも、彼女はカリフォルニアでヒッピーをしていた自由人だ。他に男がいるんじゃないか。外で何をしているのか。不安に苛まれたチャールズは、私立探偵クストフォルーに妻の素行調査を依頼。

クストフォルーがベリンダの追跡を始めてみると、彼女は浜辺で夕日を眺めたり、イルカショーをみたり、植物園に行ったり、パブでひとりで踊ったりしていた。ベリンダは明らかに自分をつけてくるのに何もしゃべらない不思議な白いコートの男を気味悪がっていたが、その愛情あるまなざしとやさしい雰囲気になんげと和んでいくのであった…。

---

違う世界を持って生きてきた二人が、そのお互いの世界を共にすることを決めた時、やはりそこに障害がないわけがありません。血のつながった家族とも違い、やっぱり気をつかうことでしょう。英国の上流階級のチャールズとアメリカの自由人ベリンダともなれば、その障害の大きさははかりしれません。どちらがどちらに合わせるもの大変です。映画のスタートまでは、ベリンダがチャールズのことを第一に考え、社交界や彼の仕事に理解を示して努力をしました。しかし、彼女はもうその生活にはついていけなくなってしまいました。でも、逃げ出したり離婚したりはしません。自分の世界とはどんなところだったかしたら、自分はどういう人だったのかしらというのを再確認することで、心を落ち着かせていこうとします。

そこに現れたクリストフォラー。恋とは違い、ただ無言で同じ場所をうろうろしているだけなのですが、妙な連帯感のようなものが二人の間に生まれます。彼曰く「自分は空っぽな人間なんだ。だからこそベリンダには惹かれた」とのことですが、彼自身もとても独特な世界観を持っています。同じような世界観を持っているからこそ、波長が合って彼女のことがよくわかったのかもしれない。しかし波長が合うとうまくやっっていけるのはまた違います。彼は彼女のよき理解者にはなりますが、夫になる存在ではない。それはハッキリわかります。

ティファニーの広告コピーで「ひとりで生きていけるふたりが、それでも一緒にいるのが夫婦だと思う」というものがありました。もちろん、人間は一人きりでは生きていきません。多くの人に支えられているのは事実です。しかし、一人ひとり、自分の世界を持って生きているわけで、それを曲げる必要がないかもしれないのに、それでも二人でいることを選ぶ。うーん、なんだかすごい。そうしたほうがよりよいものが生まれるとか、それが自然だからとか、いろいろ理由はあるだろうけれど、私にはなんだか不思議な感じがします。

世界が違うからこそその障害、そしてそれを乗り越えるには、互いの努力と相手を思いやる気持ちしかないのでしょうか。大変なことです。ですが、その大変さは何か共通のもの、共通の信念、共通の目標などがあれば、少しは軽減されるのかもしれない。ベリンダとチャールズの場合、お互いへの理解を深めようとする努力、これが少しずつ効果を発揮しそうな感じです。

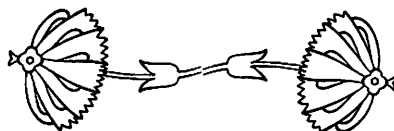
皆さんはご自身のパートナーとどうして一緒になったのですか？どんな障害があつて、どんな努力をしたのでしょうか。ふと振り返ることで、また相手に優しくなれることもあるんじゃないでしょうか。ぜひこの映画を見て、心あたたまると時をお過ごしください。

---

『フォロー・ミー』 1972年 アメリカ 93分

監督：キャロル・リード

出演：ミア・ファロー（ベリンダ）／トボル（クリストフォラー）／マイケル・ジェイストン（チャールズ） ほか







## ドゥア（祈り）のある毎日へ

アッラーよ、あなたの御名において、あなたに懇願いたします。

おお、恵み多きお方よ

おお、困難を解決し、正邪を区別なさお方よ

おお、物事を英知により変化させるお方よ

おお、困難を容易になさるお方よ

おお、創造物がご自身に服従うお方よ

おお、創造物の必要なすべてを御与え下さるお方よ

おお、創造物の状態を変化させるお方よ

おお、すべてにふさわしい美しさを御与え下さるお方よ

おお、すべてを完成させるお方よ

おお、万物を恵みにより最も優れた形で創られるお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、

あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。<sup>5</sup>



## 生活の道しるべ

「生計がうるおうことと寿命が延びることを望むも者はまず自らの血縁の絆を結ぶべきである。」



「互いに憎しみ合ったり、嫉妬し合ったり、敵対しあったりしてはいけない。アッラーの下僕達よ、あなた方は互いに兄弟になりなさい。そしてムスリムは彼の兄弟と3日以上疎遠になってはならない。」



「アッラーのみ使いは、『アッラーの御目からみて、最もいやしむべき人々は、人と激しく論争を行なう者たちである』といわれた。」

<sup>5</sup>ジャウシャン・カビール（偉大なる鎮帷子、アッラーの美しい御名と属性を知らせるお祈り）には、祈願、唱念、救いを望むことが記されています。ジャウシャン・カビールのアラビア語／日本語訳オーディオ CD・ROM またはプラスチックカバー本は出ています。詳細は：<http://www.isuramu.com/shopping>



先月号では、主人の実家のあるトルコ滞在で感じたことを書きました。興奮気味だったため内容をうまくまとめられなかったのですが、きっと私の高まる胸のうちだけは伝えられたのかなと思います。約二ヶ月の滞在を終えても、まだまだ「言葉にできない」すばらしい経験と旅の余韻に浸っています。出発前は二ヶ月なんてとても長いと思っていましたが、帰国の際には、涙、涙、とても寂しい気持ちでいっぱいでした。

実家では、特に義母とゆっくり話をしたり、一緒に過ごせた時間は本当に貴重でした。義母とはほぼ毎夜色々な話をしました。家では大して役にも立てず、言葉もつたない異国の嫁である私を大目に見てくれ、一緒に崇拝行為をしたり、ムスリムとして生きる幸せを互いに共感できることの方を本当に喜んでくれました。「ムスリムとして生きることは幸せでしょう？私達が持っているもの全てはアッラーが与えて下さっている。家族、子供、食べ物、住む所、全てアッラーに感謝。」義母は毎日のようにこのように話しました。

またもう一つ、義母の関心事といえば、私の主人である自分の息子のことです。私が主人に優しくしているか、だんな様として大切にしているか冗談まじりで質問してきます。「男の人は家で安らぎを求めている。だんな様を大切に扱って、家を居心地よくしてね。だんな様は、家族へアッラーからの恵みを持ってきてくれる人なのだから。例え夫婦ケンカをして腹が立っても、奥さんは何も言わずに利口でいなさい。」

生まれも育ちも田舎の義母は、言葉は話せても文字を読むことが出来ません。例え、本も読んだこともなく、学を持ち合わせてなかったとしても、心でイスラームを知っています。女性として妻として、より正しく生きる術を知っています。そして、純粹に、家の主人である義父に、そしてアッラーに従って生きることに喜んでいるように見えます。

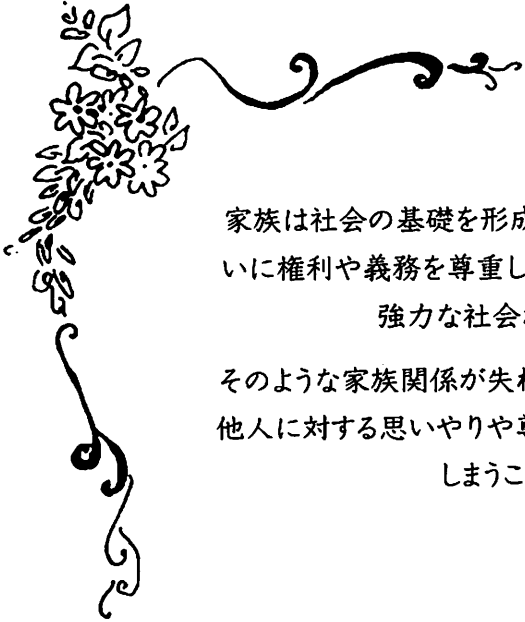
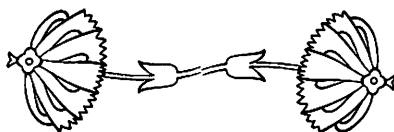
果たして、私はどうでしょうか。私は日本で普通に教育も受けてきました。けれども、私はアッラーに従いたいと思っても、主人に「従う」ということにプライドが引っかかり、長らく抵抗していました。私の態度から何か感じたのでしょうか。以前友人が指摘してくれた同じ言葉を、今回義母が言ったことに驚きました。このような母を見て育った主人は、妻としてきっと私を物足りなく思っていることでしょうか。いくら教育を受けたとしても、色々な能力があったとしても、妻として素直に夫に従える純粹さや可愛らしさに勝るものはないからです。

私が今回トルコで家族をはじめ、様々な方々にお会いして共通して感じることは、

「従う」ということにとっても純粹だということです。そこに疑問などありません。アッラーに従う、預言者様に従う、妻として主人に従う、なぜならこれがムスリムとしての生き方でアッラーがこのように望まれているからという理由だけで十分に足りるからなのです。しかし、信仰のない日本人の多くは、「なぜ？」を連発してしまうのではないのでしょうか。全てを与えて下さっているアッラーへの信頼、愛があるならば、

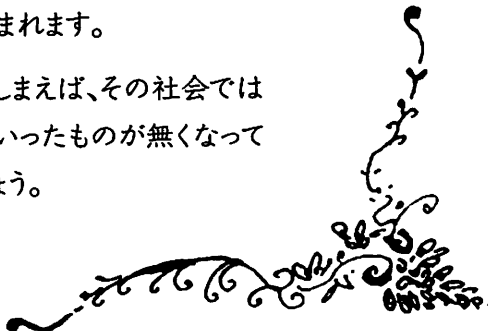
私がムスリムとしてこのように今安心して生きられること、その基盤を与えてくれている主人に感謝して従うことは純粋なことで、これがアッラーに従うことに繋がるのです。そう思えば、自分の自我やプライドなどに拘ることよりも、感謝に溢れて喜びの気持ちになります。

トルコの方々の純粋さや素直に喜びを感じる心は、日本人が一般的に思うような、家族、人間関係や経済間の様々な苦勞をシンプルに簡単にしてくれます。現代社会では、夫婦や家族でさえもバラバラとなり、同じ方向を向いて生きることが難しくなっています。さらに言えばそのような状況になっていることにさえ危機感がありません。義母や主人をはじめトルコで出会った多くの方と、ムスリムとして生きる幸せを分かちあえる喜び、家族、ウンマとして純粋にアッラーに従うことに言葉などいらず、お互いを信頼できるという素晴らしさを宗教という枠だけではなく、人間に必要な精神の糧として人々にどのように伝えていくことができるでしょうか。



家族は社会の基礎を形成します。家族のメンバーが互いに権利や義務を尊重しあえるような状況は健全かつ強力な社会から生まれます。

そのような家族関係が失われてしまえば、その社会では他人に対する思いやりや尊重といったものが無くなってしまうことでしょう。





## 血液中の奇跡の運搬者 ヘモグロビン

By YILDIZ Ibrahim, The Fountain Magazine , Issue 62

科学と技術の急速で驚異的な進歩によって、毎日私達は人体のメカニズムについての驚くべき発見を目にします。あなたは、自分の心臓が数千リットルの血液をポンプで動かすために1日でおよそ10万回も鼓動していると考えたことがありますか？そして人が生きている間に血液は数十万マイルもの旅をしているという事実については？あなたは自分の血液が、あなたにその方法を尋ねることもなく、どうやって化学反応によって酸素や栄養分をあなたの細胞に運ぶか疑問に思ったことはありますか？

血液は、生命体の為に重要な機能を実行する為に体内を巡っている非常に特別な組織である。血液の基本的な機能のいくつかは、次のようにリストアップすることができるでしょう。すなわち、体を温める、あるいは冷やす、伝染病から保護する、細胞に大切な成分を供給する、細胞から有害で不要なものを取り除く、そして生理化学的な作用を始めるためのメッセンジャーを運搬することなどです。

平均的な大人の場合、およそ5リットルの血液で、数分で循環が完了します。血液はまた、細かなニーズを満たすという完全な計画を持ち、人の命を維持するという仕事を請け負っている非の打ちどころのない奉仕者と見なすこともできるでしょう。血液が何らかの理由でこれらの働きのうちのどれかひとつですら実行するのをやめるなら、人は生きていくことができないのです。

血漿は、赤血球と白血球を浮遊させている、人の血液の主要構成要素のひとつです。このふたつの生きた細胞は、体のバランスを維持する重要な仕事を請け負います。血球は全ての生命体と同様に、一定のライフサイクルを持っています。最も気前がよく、慈悲の持ち主であられる神は、最も小さい被造物の必要としているものについてもご存知であり、そのお方にとってこのふたつの細胞を再度創造することは、春が来るごとに何十万もの果物や野菜、そして動物を復活させるのと同じように、容易なことです。興味深いことに、骨髄は絶え間なく、死んだ細胞の代わりに新しい血球を再生する工場のような働きをしているのです。

細胞でのプロセスの間ずっと必要なエネルギーを発生させる為、酸素が細胞に運び込まれなければなりません。そしてそこで生じる二酸化炭素はすぐに持ち去られなければなりません。赤血球は優れたやり方でこの義務を果たす、ヘモグロビンと呼ばれる鉄分を多く含んだタンパク質を含みます。赤血球はそれぞれ、およそ2億5千万のヘモグロビンの微粒子を含んでいます。

ヘモグロビンは調和した連続的な化学作用をとおして、肺から体の他の部分へと酸素を運び、また体

の各部位から肺へと二酸化炭素を運びます。ヘモグロビンは可逆的に酸素や二酸化炭素と結合することができます。そして酸素と二酸化炭素どちらを結びつけるかという選択はその周囲の状況に基づいて行なわれます。空気を吸うと、肺中の酸素の量は即座に増加します。そして酸素は優先的にヘモグロビンの鉄の部分と結合します。そして心臓は、それを必要なところに届ける為に体中に酸素を豊富に含んだ血液を回します。血液が動脈や静脈を通して体中をめぐる、酸素は二酸化炭素と交換されます。細胞内の二酸化炭素の量が酸素よりも多いからです。そして結合された二酸化炭素は肺に送り返され、このプロセスが繰り返し行なわれるのです。これらのプロセスの間、酸素輸送の速度、作用や量を最適化する組織的な手段の中で、非常に複雑な化学的・生物学的変化が生じているのです。

驚くべきことに、ひとつのヘモグロビンの構成単位は、同時に4つの酸素分子を運ぶことが出来ます。しかし4つの酸素分子の結合は同時には起こらず、むしろ次々と連続的に起こるのです。これらのプロセスに関する最も有名な発見の一つは、酸素がヘモグロビンの中の鉄分に吸着する時、ヘモグロビンの形が変わるということです。この現象は他の酸素が結びつくのをより容易にするのです。

高地では、低地と比較して空気はより少ない酸素を含んでいます。より高い地点で暮らすことに慣れている人々は、2,3-BPGとして知られる血液中の化学物質の量がより低い地点で暮らす人々よりも多いということがわかっています。研究者は、酸素の少ない空気の中でもより容易に酸素の運搬が行なえるよう、この化学物質がヘモグロビンと結合することを明らかにしました。この化学物質がなくなれば、高地では人々は酸素不足に苦しむでしょう。そして必要不可欠な器官のいくつかが徐々に死滅していくでしょう。これは、最も慈悲深いお方とその力の存在の、決定的で自明の証明であることは明らかです。

また胎児のヘモグロビンは、大人のヘモグロビンよりも非常に酸素を好みます。胎児性ヘモグロビンは母の血流から母の酸素を利用します。そしてこの能力は、よりよい生存の為に胎児がよりよく酸素を得ることができるようにするのです。そうでなければどの赤ちゃんも母の胎内で完全に成長することはできないのです。神の慈悲は母の胎内の無力な赤ちゃんが必要としているものをもご存知です。そしてその英知と偉大さは、完成されたツールや装飾を、それを必要としている全ての人に与えるのです。

人の体は、一切の混乱なく、人の生命を支える為に立派に機能する、芸術的な装備を持つ完璧な機械と見なすことができます。その最も小さなニーズも、大きな英知と技術によって計画された驚くべき設計によって満たされるのです。この美しさと完成された技術、最高の完全性は英知ある創造者であり全知であられるお方の存在を証言するものです。この素晴らしい作品が意志を備えた芸術家の作品ではないと主張することは、美しい絵がよい画家の作品ではないと主張するのと同じくらい愚かなことです。赤血球の構成要素であるヘモグロビンのひとつひとつさえも、その統治の高度さと各プロセスの管理の細やかさは、議論の余地なく、この上ない英知と力を持つ創造主の存在を示しているのです。創造におけるその比類なき力は、地上でよりよく見ることができます。



「一層一層に、7天を創られる御方。慈悲あまねく御方の創造には、少しの不調和もないことを見るであろう。それで改めて観察しなさい。あなたは何か裂け目を見るのか。」(大権章第3節)

突然変異は、ヘモグロビンの生産を請け負う遺伝子の配列を変えます。そしてそういった遺伝子を受け継ぐことで、次の世代に遺伝性の病気の発生を見ることができます。例えば地中海貧血症や鎌状赤血球症などです。これらの病気を持った場合、ヘモグロビンは十分な酸素を運ぶ力を持たず、ひどい場合には患者の生存の為に輸血が必要となります。突然変異はそのシステムの不調につながります。突然変異が生命体にとって好ましい変化を起こすことは見受けられません。運や偶然の一致によってこれらの美しく、複雑で、調和のとれた完全な細胞の形成を説明しようとする事、これらのシステムの創造を意志をもたない自然の作用によるものであると考えることは、理に適うあらゆる科学的説明から程遠いものなのです。

「元々かれは射出された、一滴の精液ではなかったか。それから一塊の血となり、更にアッラーが、(均整に)形作り」(復活章第37-38節)



## レシピコーナー

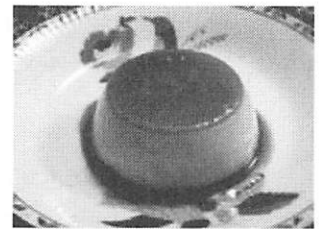
### プリン

#### 材料：

牛乳 2カップ      砂糖 70グラム      卵 3個      バニラエッセンス 少々

#### 作り方

- ☞ お鍋に牛乳と砂糖を入れ砂糖が溶けるまで掻き混ぜる。
- ☞ ボールに卵をほぐし、そこに牛乳を少しずつ入れていき、よく掻き混ぜ、こす。
- ☞ そこにバニラエッセンスを加え、容器に流す。
- ☞ 150度で30分ぐらい焼く。鉄板に水を入れ、その上に容器をおく。





アフメット・セリムのある言葉を、私は思い出している。「譲歩はしてもらうものでもあり、するものでもある。」という言葉である。どれほどうまく言い当てていることだろう。生活のあらゆる場面であてはめることのできる言葉だろうと思う。人は時には、長い目で見て何かを得る為に、何かを手放す必要に迫られることがある。大切なのは、それを意志を伴って行なうことなのだ。

一つの企業を考えてみてほしい。80年代、インフレ率が100パーセントに達していた時代を思い出して見てほしい。多くの企業が、それを乗り切るための作戦を講じていた。意識的に、自発的に商売の規模を縮小していた。工場を閉鎖し、不動産を売却していた。従業員を解雇していた。なぜならその状況で生き残る為にはこうするしかなかったのである。そして時代は変わった。インフレはおさまり、市場規模は拡大した。今度は同じ企業が逆の方策を取り始めた。すぐに失ったものを取り戻し、さらには資産を倍増させたのだ。

ところで、この時代、ちょうどこれとは逆の方策を講じた者はいなかっただろうか？当然、いたのである。彼らは手放すこと、売却すること、縮小することを考えなかった。「木曜日に来ることを、水曜日のうちに考えられなかった」のであり、今となってはその多くが歴史という名の過去のくずかごにある。

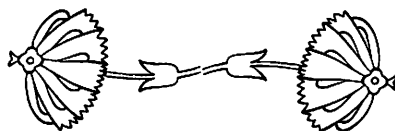
家庭内の政局においても、これはこのとおりのことである。夫婦は双方向の仲のよさや幸福、やすらぎを維持する為、時には互いに対し譲歩することが必要なのだ。「私は主義を通す人間であり、言ったことをたがえることはない。」と言い、「私のいうことが絶対なのだ」という頑固な性質を持つ人のように譲歩を求めることは、人に何も獲得させない。逆に、戻ることのできない過ちを犯す要因となる。ここで重要なのは、放棄されたもの、手放されたものが意識的に手放されるということである。さらには次のように言うことも容易であろう。家庭内の方策の基盤には放棄すること、断念することがあるのだ。自分の感情を放棄し、自分の考えを断念し、自分の主義を断念し、自分の目標をあきらめる。しかしそれは何の為だろうか？そう、大切なのはこの点である。表現が正しければ、ここが分岐点なのである。この問いの答えは簡単だ。得る為である。目標に到達する為である。

私がなぜこのような文章を書く必要を感じたか。理由は次のとおりである。この間、ある人からもらったメールがある。「私は自分の主義を曲げることはない。今まで何度、私が犠牲を払ったか知れない。でも相手はいつでも自説を固持するばかりだ。今度は相手の番だ。肯定の返事をして私の要求に応えるか、相手がそうしないのならこの結婚を放棄するまでだ。」

このメールを読みながら「全てが、あなたが思っているほどに簡単であつたらよかつたんだろうがね。」と内心思っていた。2人の子供もいて、10年も続けてきた結婚生活をそんな風に簡単に終えさせることは不可能だという考えのうちにそう思ったのである。メールを書いた人が理解していない、あるいは理解することを望んでいないひとつのポイントがある。人間と呼ばれる存在の育成というものは、一朝一夕に、一度だけ説明し、教え、覚えさせることで成し遂げられることではない。逆に、人間に何かを教えることは一生を必要とするものなのだ。「私は説明したし、相手は受け入れた。これで完了だ。」いや、それは終わっていないのだ。本当の仕事はそこから始まるのである。あなたが正しいと言っている、正しいと認識しているそのこと、—それが何であれ—それが相手の知性や思考に受け入れられることによって全てが始まる。次にはそれを実践に移すという段階がくる。そもそも問題の多くは、この段階で姿を見せ始めるのである。

メールを送ってくれた人は、細かな部分を説明しているわけではない。だから私は、そこで起こっている出来事について何かを言う立場にはない。その為、一般的な意味でいくつかの考えを文章にしたのだ。

要点は、もしあなたが結婚していて相手とうまくやっていくことを望んでいるなら、あなたの家を天国の庭園としたいのなら、女性であれ男性であれ不要なところで意地を張ってはいけない。「私は主義を守る人なのだ。」「私の言い分か、彼の言い分かどちらか、ゼロか100か。」といった処しがたい状況に踏み込んではいけない。明日には謝る必要に迫られるような言葉を放って、一生その言葉の捕虜とはならないでほしいのだ。






思春期のころ、結婚後、妊娠、出産後、そのたびに家族の意味や、役割のようなものを考えています。家族の基本は男女、つまり夫婦が基本となっています。その家族の（社会の）基本が夫婦関係にあるということを知ってから、しみじみ夫婦関係は大切なものだと思っています。

どんなに子供と母親の関係がうまくいっていても、子供と父親の関係がうまくいっていても、夫婦の関係がうまくいっていないとバランスのとれたものとはならないし、居心地も悪くはまずです。そしてなにより子供はとても影響を受けやすいし、様々な影響を受けながら成長するものです。子供にとって親は最初のモデルであり、最も影響を与える存在です。時々自分の子供のしぐさを見たり、言葉遣いを聞いた時に、「しまった！」と思うことがあります。そんな時はたいてい子供にはまねをしてほしくないけれど、自分がついやってしまうしぐさや言葉遣いをしているのです。そんな子供の姿をみて、自分を振り返りこのしぐさはやめようとか、この言葉遣いはやめようとか、そんなことを思います。

子供は親の行動をあらためさせるようなそんな存在でもあります。子供にみられては困るようなことや、まねをしてほしくないことは、自分の行動を見直すことにつながります。近所の子供と会った時に、挨拶を先にされると自分が挨拶をしなかったことにちょっと恥ずかしい気がします。と同時にそんな子供たちがとても愛らしいなと思います。良い、悪いに忠実で、そして素直な子供たちの姿をみると、自分自身を振り返らないといけない点が多くあります。

親は子供のモデルのようであり、子供も親に良い刺激を与えるような、そんな関係にあります。親も子ももちろん人間すべて完璧ではないので、良いことだと思っていたことが実は悪かったということもあります。それから当然のように思っていたことも実は良くない結果につながったということもあります。ある程度の年齢になると、意識的にも、無意識的にも親をモデルに成長してきている中で、疑問や疑いがでてきます。親はこうしているけど、ちょっと違うと思う。なんてこともあるはず。そこで親ではないモデルを探し始めるのです。それは親ではない別の大人の人や、有名人であったり、ある偉業を成し遂げた人だったり様々ですが、完璧な人などいません。そこで私がたどり着いたのは信仰だったようです。信仰心というのはどの人にもあると思っています。祈ることもするし、願うこともするだろうし、自然な人間の姿のように思えます。信仰はぶれることがないので、私のとてもよいモデルとなりました。信仰をもっていないという人もいますが、そういった人にも信念があるはず。自分流の信念かもしれません。別の自分流の信念もあるでしょう。人間の数だけ信念があるでしょう。私は自分の信念というものにも疑いをもちました。他の人の信念にも疑いをもちました。でも信仰にはそれがありませんでした。





自らの高潔さ、そして家族の貞節さを守ることに敏感でない人々は、  
民族の品位や名誉を守り、  
保護することにおいても敏感ではないだろう、  
ということは明らかである。

定期購読 国内:6ヶ月 1300円、1年 2500円

定期購読 国外:6ヶ月 1600円、1年 3000円

バックナンバーや1年分の総集編もございますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

郵便振替口座番号: 00100-6-354012 口座名義: 月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号: 630(春日部) 口座番号: 1134374 口座名義: 月刊誌やすらぎ

皆様のご意見、ご感想、ご質問を心よりお待ちしております。  
「やすらぎ」編集部

<http://www.yasuragiweb.com>  
[info@yasuragiweb.com](mailto:info@yasuragiweb.com)  
[yasuragi\\_nihon@hotmail.com](mailto:yasuragi_nihon@hotmail.com)

〒156-0045東京都世田谷区桜上水3丁目24-4、203  
156-0045, Tokyo-to, Setagaya-ku, Sakurajousui, 3-24-4-203, JAPAN